

『2024 年度学生生活実態調査報告書』刊行にあたって

本書は、学生センターが実施している「学生生活実態調査」の2024年度報告書です。本調査は2024年6月21日から同7月31日にかけて実施・回答されたものであり、1年生は入学後・春学期の新生活の経験に基づいて、2～4年生は前年度までの経験も踏まえつつ、それぞれ回答してくれたものと思われます。回答結果の分析については、市ヶ谷副学生センター長の木村純子先生（経営学部）にお力添えを賜りました。この場を借りて心より御礼を申し上げます。詳しくは分析内容を記載した「調査結果に関する報告」をお読みいただければと存じますが、ここでは学生センターの観点からいくつか気になった点について言及しておきたいと思えます。

まず、調査の回答数・回答率についてです。2022年度は3190人・11.8%と比較的良好な結果を得られたのに対し、2023年度は1768人・6.4%と低調に逆戻りしてしまったことから、今年度はHoppii配信による複数回の周知の実施や、学部X（旧Twitter）での周知依頼をするなどの対策を採ったところ、1964人・6.9%と微増したものの、十分な成果が得られたとは言い難い結果となりました。担当者からは、現在の学内周知体制の限界も感じられるので、来年度は新たな周知方法等を検討する段階かもしれないとの意見も出ており、次年度の改善に向け、なるべく早い段階から検討を進めたいと考えております。

昨年度、対面授業が増えた影響か、「モラル・マナーの低下・欠如」を感じたのはどんな時かという問いに対し、「授業中の私語」の回答割合が増えており（2022年度59.4%→2023年度69.0%）、2024年度はこの割合が減ることを切に願うと書いたのですが、残念ながら74.6%に上昇してしまいました（Q17-1）。自由記述欄においても、授業中の私語が気になる旨の回答が複数見られ、迷惑を感じている学生がかなり多いことが窺われます。この結果は必ず学部で共有し、対策の検討をお願いしたいと思えます。

なお、関連して、授業が対面に一斉に切り替わり、オンライン授業が激減したことに対する戸惑いや不満も、少なからず指摘されています。授業の内容・性質にもよりますが、同時配信を活用することにより学生の受講機会が増すのであれば、大学・教員側はもう少し積極的に（対面授講者とオンライン受講者の均質性・公平性が担保される限りにおいて）オンラインの活用を模索してもよいのではないのでしょうか。

サークル活動（Q38）については、2022年度から3年生・4年生の参加割合が減っているのが、やや気になるところだと昨年度指摘をしましたが、この傾向は今年度も続き、1・2年では「参加している」が上回っているが3・4年では「参加していない」の方が多いという分布が3年連続することとなりました。これは2013年から2021年までにはほとんど見られなかったもので、近年の特徴的傾向といえるかと思われます。あるいは就活の早期化が影響しているのでしょうか。

学内で危険な目にあったことがあるかという問い（Q18）に対する回答では、昨年度気になった「政治セクトによる勧誘」は、今年度は目立つ数字ではなかったのもやや安心を致し

ましたが、他方で、「ハラスメント」(36.4%)や「マルチ商法や高額機材購入などの悪徳商法」(15.2%)が昨年に比べるとやや目立つ数値でした(Q18-1)。特に後者に関しては、今年度市ヶ谷・多摩・小金井の各キャンパスで相談事例も出てきており、注意喚起を定期的を実施する必要があるように思われます。

本調査の設問に関しては、毎年少しずつ見直しが行われていますが、今年度はやや大きく聞き方を変えた項目がありました。ひとつは大学祭への参加に関する設問です。昨年度までは1年生から4年生全体に対して同じ問いかけをしていましたが、今年度から2~4年生向けの設問(Q41)と1年生向けの設問(Q42)を分けて問うことにしました。詳細は「調査結果に関する報告」をご確認ください。

もうひとつは、法政大学校歌を歌えるかに関する問い(Q20)です。昨年度までは歌えるか・歌えないかの二択で尋ねていましたが、今年度からもう少しポジティブな選択肢を増やして尋ねたところ、(予想どおり)「歌えない」の割合は減少しました。ただ、これはあくまで聞き方を変えたことによる影響にすぎないようにも思われますので、歌えない学生を減らす(歌える学生を増やす)方策も、引き続き検討してまいりたいと存じます。

次年度に向けた改善点としては、「正課外学習」(Q34)について、学生がもっと具体的にイメージをしやすいように、選択肢の見直しをしてみてもよいかなど感じられました。

以上、学生センターの目線から特に気になった点を挙げさせていただきました。

昨年度、授業(正課)とアルバイト(生活手段)以外に、何かひとつでも学生生活を彩る正課外活動にいそしむ環境が各学生に整えばよいのに、という趣旨のことを書きました。その思いは今も変わりませんが、最近、正課の延長線上にあるような正課外活動を模索する動きも見られるなど、学生の効率重視・タイパ重視の傾向がますます強まっているような印象を受けます。一見無駄に見えるようなことが人間的な深みや幅広い教養につながり得るということを、もっと学生に知ってもらえるよう、学生センターとしても本調査の結果を活かしつつ、引き続き諸活動を進めてまいりたいと存じます。

2024年10月

学生センター長 武生 昌士